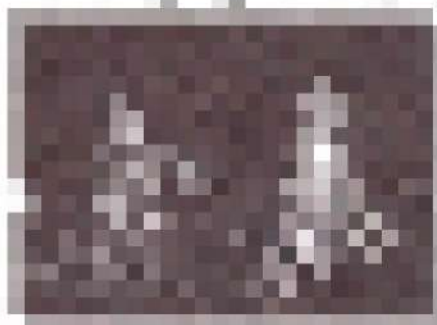


総裁アンドレアス・ホモキの演出は、上下する吊り舞台を駆使し、観客の想像力を膨らませたが、演技力のあるキャストが集められなければ、スポーツチームとして登場するコリント人や、骸骨の帽子でコスプレした魔界のシーンなどで、失笑を買って終わっていたかもしれない。しかし、題名役や、「狂乱の場」で追真の長丁場を見せたクレオン役のナウエル・ディ・ピエロ以下、各役適材に恵まれたため、メデの衣裳を舞台上で効果的に着脱させたり、クレオンとオロントの最期を再現させる手法などの素晴らしい捌き方も光り、上演を成功に導いた。

古楽の第一人者であるウィリアム・クリスティは、シャルパンティエ独特の寂寥感を聴かせるよりも、この物語の激しさを優先していたが、フレーズは美しく歌わせ、終演後もメデの衣裳に合わせた真っ赤な靴下を見せびらかすなど上機嫌だった。このプロダクションは、メデア物語（古代ギリシア、エウリピデスの悲劇による題材）の金字塔として、語り継がれるのではないだろうか。（中東生）



Opera 金字塔となった、
チューリヒ歌劇場《メデ》

チューリヒ歌劇場、新年最初の新演出であるマルカントワース・シャルパンティエ作曲《メデ》（メデア）は1月22日、観客にとってお年玉のような初日を迎えた。その立役者は当歌劇場デビューとなった題名役のステファニー・ドストラックだ。13年前からこの役を歌い続けている彼女の、愛に依存する弱さと復讐に狂う強さを自然に両立させたメデ（メデア）像は、時代を越え、等身大に迫ってくるからこそ最後は目を背けたくなるほど恐ろしい現実味を帯びてくる。